

◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

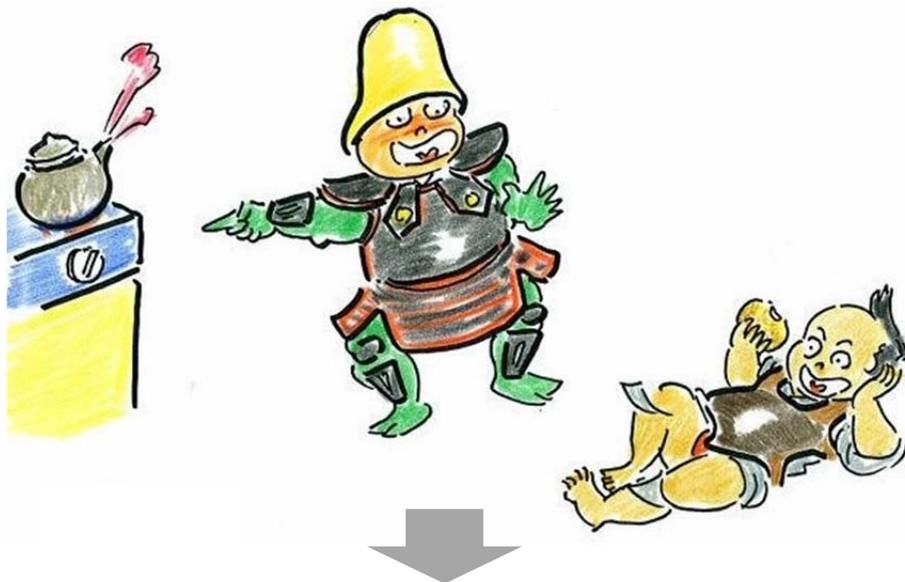
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。





そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！



援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

主な登場人物



援ちゃん 5歳



支援くん



ご助 (中間)



ミーちゃん (飼い猫)



ママ



パパ



閻魔様

支援くんの火災予防奮闘記

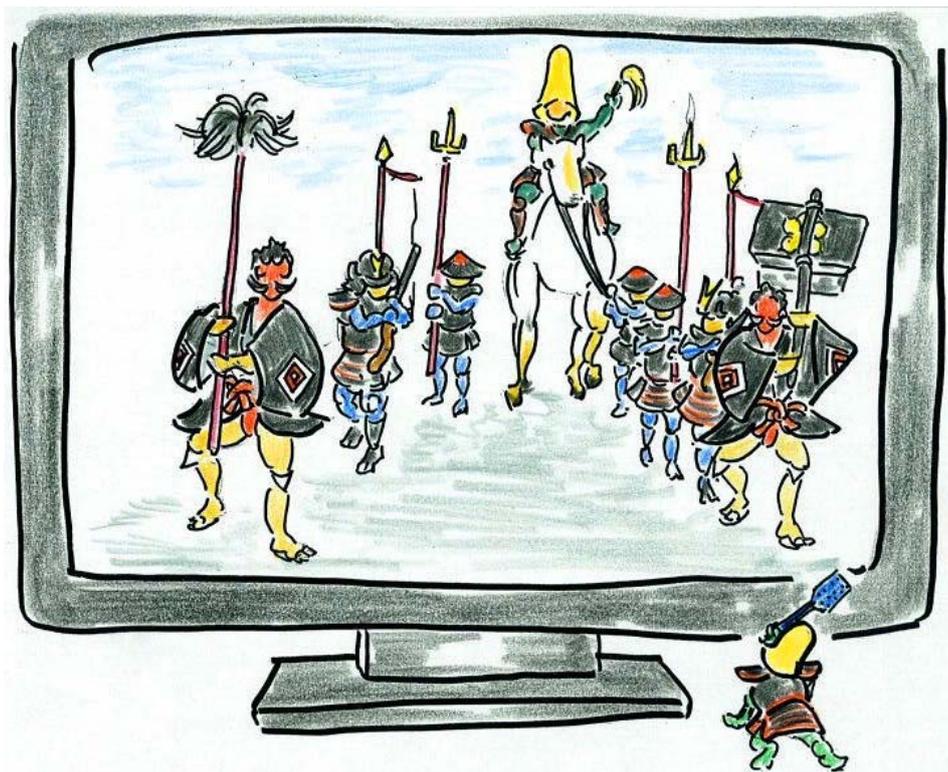
～火災を起こさないために～

Vol.19

今年も加賀百万石の祖、前田利家公の金沢城入場を再現しお祝いする金沢百万石まつりの時季がやって参りました。

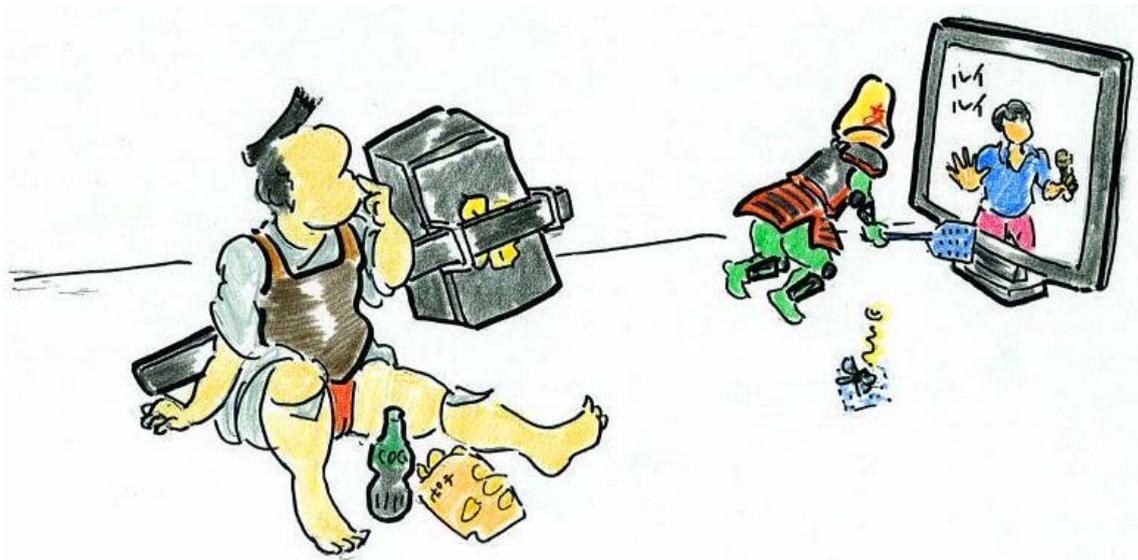
加賀鳶はしご登り行列や音楽パレードに続いて、馬上颯爽と武者行列を指揮する利家公の行列が現れますのじゃ。

拙者もいつかはあの立派な時代絵巻の武者として・・・と思っていたのですが、今年も実行委員会からは何の連絡もありません。



「残念でしたな旦那様。まあ声が掛からなくて正解でさ。3キロも挟み箱を持って歩くなんざ狂気の沙汰ですぜ。」というご助に

「情けないことを言うな、大名行列に連なるのは名誉なことぞ。」とたしなめたのじゃが



「旦那様、名誉で飯は食えませんぜ。ささ、夕食の支度が出来ましたぜ。」とご助。

そのご助に向かい

「そちの食事当番は偏ってていかん。朝からコロッケで昼は唐揚げ、晩は何じや。」と聞きますと

「へへへへ・・・まだ油が残ってましたんでサツマイモの天ぷらでさ。」とご助の返事を聞きまして、

「おまえなあ今週ずっと揚げ物じゃないか？」と拙者は文句を言いましたのじや。」

そういたしましたらな、ご助の奴めが



「嫌なら良いんですぜ。」と膳を片そうとしましたので

「待て待て、食わんとは言っておらんじゃろ。」と慌てて押しとどめたのじや。

「なんでえ、食うんなら文句を言わねえでくだせえよ。」と今度はご助が文句を言いだしまして……。いやはやどっちが主人か分かりませぬ。

「仕方ないの頂くか……。何じゃ真っ黒じゃないか。」と拙者が言うと

「おかしいんでさ。何時もと同じように揚げたんですがねえ。」とのご助の返事が。

「油は代えておるんじゃの？」と聞いてみると

「馬鹿なこと言わないでくだせえよ、この物価の高いさ中に何をたわけたことを。旦那様の給金じゃ勿体なくてなかなか捨てるれませんぜ。日曜から注ぎ足し注ぎ足しでさ。」と胸をはって答えますのじゃ。

「た、確か……。き、今日はもう木曜じゃが一回もか？」と聞き返しますと、

「当たり前でしょ。」と 即座に答えるご助に

「三度三度揚げ物ばかりでか？」と指を折って数えるふりをいたしますと

「15回でしょ、15回。計算できねえんですかい？」と馬鹿にしたように言うご助に堪らず

「あのおーもしもし。」と尋ねたのじゃ。



「何ですよ？」というご助に

「ちょっとお聞きするのじゃが『酸化』を知っておろうの？」と聞いたのじゃ。

「参加？まだ未練たらしく百万石行列の話ですかい？」と答えるご助に

「ち、違う違う。こ、こう書く酸化じゃ。」と紙に書き記しますと、その字を

見たご助は

「へっ?・・・へええ・・・こ、小難しい字ですな・・・。でも、私も似たような字なら知っていますぜ。右のを消して左にサズイを付ける・・・さ、酒って字ならよっく知ってます。」とご助



「極め付きの馬鹿じゃな。」と ご助の能書きを聞き終えた拙者は、ややあつてから、嘆息まじりにつぶやいたのじゃ。

「な、なんでえそんな言い方しなくても・・・。あっ、でも今思い出しやした。

あ、油を何回も使い回しすると酸化するって聞いたことがありますあ。」とご助

「そうか、やっと思い出したか。では聞くが、酸化した油は体に・・・良いのか？・・・悪いのか？」

「ええっと・・・酸、酸化だから・・・えっと、油が酸素を吸うんでしょ？ た、確か奥方様の通っておいでのリムに酸素カプセルってのがあって・・・」というご助に

「酸素カプセルが出てくるのかい・・・まあ良い。それで？」と重ねて聞きますとな

「だ、だから、そのカプセルに入って酸素を吸うと元気になれるとご主人様に話しておったから、酸化した油は体にとっても良いんですじゃ！これが正解！」とご助。

「体に良い。ファイナルアンサー？」と拙者が聞きますと



「ファイナルアンサー。酸化した油を摂取すれば元気になれるし、摂れば摂る程お肌つやつやの美男子になれる！」と答えたのじゃった。



「うん。やっぱり馬鹿じゃったな。酸化した油は体にとっても悪いのじゃ。」

と拙者が教えますと

「な、何でですかい？」と聞き返すご助に

「酸素カプセルはの、カプセル内の気圧を高めて血液中の酸素濃度を高めてじやな、体の隅々にまで血液をいきわたらせ新陳代謝を高めるものでな、疲労回復などの効果が期待できる。」

「何でえ、やっぱり良いんじゃないですかい。」と口をはさむご助に

「まあ最後まで聞け、一方の酸化した油はな、過酸化脂質という体に有害な物質になってな、肝臓障害や動脈硬化を引き起こす可能性や DNA を損傷させる発がん物質にもなると言われておるんじゃ。それに酸化した油は燃えやすく、熱を持って自然発火する危険もあるんじゃ。」と教えたのじゃ。

「ほ、本当ですかい？」

「本当じゃとも。全国では紙に包んだ天かすをゴミ箱に捨てて、そのゴミ箱から火が出て、火事になった事例もあるのじゃぞ。」

「し、自然発火ってやつですかい？まるで人魂みたいですかい？」とご助。



「また馬鹿なことにつなげるんじゃない。自然発火は本当にあるのじゃ。油は何度も繰り返して使っても良いことは一つもない。覚えておくのじゃ。」

「へええ旦那様、さすがですな。」とご助。

「見直したか。うん?なんか臭わんか?」拙者はさつま芋が焦げるような臭いに気付き

「ご助よ、ガスは消したんじゃないろうな?」とご助に訊いたのじゃ。

「・・・へ、へえ・・・消すには消したんですが。」と答えるご助に

「消したのなら良いんじゃが。でも何か臭いの。」

「えへへ、ガスは消したんですが別の奴が。」とご助。

「別の奴？」ときく拙者の横で ぷうううん と。

「ご、ご助。おのれは又しても芋屁を！」

